

がんになったら、 まず相談！



がん相談支援センターは、がんに関わる相談の窓口です。

ある日、前立腺がんの患者さんから「医師は『手術も放射線治療も受けられます。どの治療にしたいか決めてください』と言うが、どうやって決めればよいかわからない」という相談がありました。がん治療では、限られた時間で複数の治療から選択する場合があります、こうした相談は非常に多く寄せられます。

相談員は医師から説明を受けた内容を一緒に振り返り、その方が不安に思う事を確認しました。『尿失禁が起こる場合があるが、ほとんどの人が数か月で治ります』という説明の内容から、「尿失禁が起こるのか。どんな風に？治らない場合もあるのか」という疑問と不安が明らかになりました。その方は週に数回、2時間電車で通勤しており、旅行も好きでよく出かけるため、自分の生活や趣味への影響を心配していました。相談員は症状の実際を説明したり、医師に「こういう事をしたいが、この治療の場合だとできなくなってしまうか」など具体的な質問の仕方を提案しました。「どのように考えて決めればよいかが見えてきました」と言って自分で考えられるようになるのです。

情報を提供するだけでなく、その情報をどのように解釈して自分の事として考えるか。私たち相談員も患者さんを支えるチームの一員として支援しています。診察の間では言いにくい事など、是非がん相談支援センターを利用してください。



がんと私

50代 女性 肺がん

人生百年と言われる時代、私のがんになったのは半ば過ぎの55才でした。これから何かしようと思った矢先でした。年に一度の健診で肺がんが見つかり、翌年脳転移、8ヶ月後に新たな脳転移が見つかりました。3年間で手術、化学療法、放射線療法2回をやりました。一番ショックだったのは、脳転移でした。幸いガンマナイフという治療法があり、3日間入院して、治療は一日で2時間位で終了し、痛みは特にないという治療でした。

患者会があることは手術で入院中の病院の図書館で知り、いつか行ってみようと思っていました。初めて参加したのは一回目のガンマナイフ後で、落ち込みのピークは過ぎていましたが、話すことで抑え込んだ感情を吐き出せたこと、話したいことを話してスッキリしたことを覚えています。

何回かサロンに通い気持ちに余裕が出来ると、家族の姿が頭に浮かびました。いつも温和な家族にも感情を吐き出す場所が必要だと感じたのです。私の会にも家族サロンがあると聞いていたので、先日リモートで参加してみました。家族の思いも聞けましたし、亡くなった当事者がもし自分であったらどう思ったであろうかというお話などもできました。少しは患者として役に立てたかもしれないと実感し、プチ幸せです。がんになっても人の役に立てる喜びを感じ、新たな目標を見つけた気がします。